

青山の歌 (頼山陽)

青山 昨 我を 送り

青山 今 吾を 迎う

黙して 数うれば 山陽 十たび 往返

山翠は 依然たるも 我は 白鬚

故郷に 親 有り 更に 衰老

明年 当に 復 此の道を 下るべし

青山昨送我
青山今迎吾
黙数山陽十往返
山翠依然我白鬚
故郷有親更衰老
明年當復下此道

解説 山陽は母の病氣を知り、青山を通りながら、広島と京都を往復した感慨を述べた詩。山陽、時に五十一歳。

語釈 ※青山 兵庫県武庫郡にある、六甲山の一丘。標高三〇九メートル。形が甲に似ているところから甲山とも呼ばれる。※山翠 山緑に同じ。山のみどり。
※白鬚 白いひげ。 ※衰老 年老いて体力の衰えること。

通釈 六甲山の一丘の青山は、自分を送り、また迎えてくれる。京都から広島へ、そして広島から京都へと、度々の往復で青山は馴れ親しくなった。何回往復したであろうか。静かに目を閉じて数えて見れば十度ほどになる。山の緑は今も滴るばかりに青く、自然の姿は依然として昔のままが、いつか私は衰えを感じる歳になり、ひげもめつかり白くなった。子がそうし態であれば、故郷の母上はなおさらである。孝養を尽くすは子のつとめ、来年もまた、私はこの道を下って、母の安否を問うことであろう。